

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年2月25日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21560643

研究課題名（和文）多摩ニュータウンにおける女性を中心とした地域活動とその拠点の変遷

研究課題名（英文）The Transition of Community Activities Led by Women and Their Hubs in Tama New Town

研究代表者

松本 真澄（MATSUMOTO MASUMI）

首都大学東京・都市環境科学研究科・助教

研究者番号：60229573

研究成果の概要（和文）：

多摩ニュータウンにおける地域活動を概観し、地域活動の拠点 10 カ所を選定して使われ方の調査を行った。さらに、開発初期の 1972 年から活動を始めた文庫活動を対象に、散逸していた当時の資料を収集し整理・分析した。活動初期のメンバーへのインタビュー調査を行い、活動を開始した動機、活動内容の変容などを、活動拠点の変遷との関係から分析し、活動拠点と活動内容が相互に影響を与えていること等を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This article surveyed the community activities in Tama New Town, chose ten hubs of the activities and investigated how those were used. In addition, this study collected and analyzed scattered and lost documents produced in the activities of children library. We interviewed a member of the early period of the activities, and analyzed the motive for starting the activities and the transformation of activity contents from the relations with the change of the hubs. The analysis showed that the hubs and the activity contents influenced each other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目： 建築学 ・ 都市計画・建築計画

キーワード： 郊外 文庫活動 ジェンダー 地域施設

1. 研究開始当初の背景

計画人口30万人を擁する我が国最大のニュータウンである多摩ニュータウンは、開発が着手されてから半世紀を迎え、新規開発・建設はおおむね終了し、ストックマネジ

メントの局面に入っている。こうして成熟都市へと向かいつつあるなか、今後も多くの人々が地域継続居住を果たし、充実した生活を送るためには、コミュニティなどのソフト面の充実と地域施設再編などのハード面の

整備が、両輪として有効に機能していくことが重要となる。

ニュータウンは古くからある地域の文脈と切り離して造られているため、地域コミュニティの醸成には、さまざまな地域活動の存在が不可欠だといえる。そして、ベッドタウンとして建設された多摩ニュータウンの地域活動の特徴を捉えるためには、これまで活動の多くを担ってきた女性に着目することが有効だと考える。さらに、開発期間が長期化した多摩ニュータウンは、他のニュータウンと比較して、地域活動の変遷と、まちの発展及び施設整備との相互関係を捉えやすい面がある。

学術的背景としては、女性が中心となった地域活動としては、都市社会学分野で教育文化活動などの研究蓄積があるが、ニュータウン形成史の中に位置づけた研究はみられない。一方、多摩ニュータウンの地域施設に関する研究は、建築や都市計画の分野において、利用実態、利用構造に関する研究が多数あるが、これらの研究の多くは一時点の調査であり、活動内容と活動拠点との関係性を時系列的に捉えて検証していない。さらに、多摩ニュータウン学会では、開発に携わった人々のオーラルヒストリー研究が大規模に展開されているが、新たに住民となった女性の活動については対象とされていない。つまり、本研究の対象である、多摩ニュータウンにおける女性を中心とした地域活動の変遷とその拠点との関係を時系列的に明らかにした研究は他にはみられない。

これまで多摩ニュータウンをフィールドとして、地域継続居住を実現するための知見を得るため、多角的な研究を行ってきた。これらの調査過程での居住者へのインタビューを通して、生きがいなどにつながる主体的な地域活動が重層的に存在することの重要性と、そうした活動が活動場所の有無や施設のあり方に強く影響されていることを認識するに至ったことが研究の動機である。

2. 研究の目的

本研究では、多摩ニュータウンで行われてきた女性を中心とした地域活動の代表的な事例を取り上げ、活動経緯、個々のメンバーのかかわり方、活動拠点との関連性を整理し、それらの相互関係を明らかにした上で、その変遷を検証することを目的とする。

特に、活動メンバーは、特定の活動のみに関わるのではなく、活動内容を発展させると同時に、他の活動へと展開することも多くある。そこで、活動内容と拠点との相互のダイナミックな動きを捉えると同時に、活動メンバー自体の活動展開を関連づけながら理解することが、今後の地域継続居住や施設再編の方針を定める上で、大きな示唆を与えると

考える。

3. 研究の方法

研究は以下の方法により行った。

(1) 多摩ニュータウンにおける、NPO活動の概要を把握し、これらの拠点の位置を整理し、地図上にプロットする。

(2) 多摩市の地域施設の変遷について資料を収集し整理する。

(3) 開発初期から活動を継続している地域活動に焦点をあて、関連資料の収集を行う。さらに、これらの資料の整理を行う。

(4) 地域活動メンバーへのインタビュー調査を行う。

(5) インタビュー調査内容の書き起こしと活動内容の整理、分析を行う。

(6) 地域の活動拠点の利用状況を把握するため、アンケート調査および観察調査を実施する。

(7) 地域活動と活動拠点との関係の把握、時系列的整理と課題の抽出を行う。

4. 研究成果

(1) 多摩ニュータウンの地域活動

地域活動としては、自治会や管理組合といった地域組織や老人会やPTAといったものが代表的である。分譲集合住宅が約半数を占める多摩ニュータウンにおいては、まちづくりの観点からみても管理組合の果たす役割は今後ますます大きくなることが予見される。多摩では管理組合の連絡会があり情報共有など横の連携がはかられている。また、趣味のサークルやスポーツ団体などの共益性の高い団体の活動も盛んに行われている。地域活動の拠点として調査した10カ所の「居場所」においても多種多様なサークルや団体が趣味活動を盛んに行っている。

こうした中で、多摩ニュータウンの地域活動の特徴づけているものは、市民活動だと考えられる。内閣府の調査では、市民活動団体を「継続的、自発的に社会貢献活動を行う、営利を目的としない団体で、特定非営利活動法人及び権利能力なき社団（いわゆる任意団体）」と定義しているが、こうした団体がニュータウンには数多く存在している。多摩市のNPO法人数は平成22年4月時点で76団体あり、多摩地域の26市の中では人口あたりのNPO法人数は最多となっている。

多摩市の市民活動の内容を概観すると（「多摩市NPOセンターにおける市民活動支援に関するアンケート集計結果（平成19年11月）」）、回答のあった106団体の内訳は、NPO法人が37、任意団体が32、ボランティア団体が56、その他（自治会、社団法人等）が13であった。活動分野（複数回答）は、福祉、社会教育、まちづくり、学術・文化・芸術、子供の健全育成などがあげ

られている。

まちづくりを活動分野としてあげる団体の割合は、全国調査（平成20年度 市民活動団体等基本調査報告書 内閣府国民生活局 平成21年3月）に比べて多くなっている。多摩市内のまちづくり関係のNPO団体の所在地をみると、ニュータウンエリア内に多くあり、まちづくりへの関心が高いことが推察できる。

活動の拠点である事務所の有無については、事務所を持っているのは23団体、代表者等の自宅を活用しているのは21団体、代表者等の自宅を名義利用しているのは34団体、残りの23団体はボランティアセンターやコミュニティ施設、共同で事務所などを利用している。また、会議や作業の場の提供や共同利用できる事務機器の提供への要望が高いことから、今後こうした市民活動のサポートには、活動拠点の整備が求められていることが読みとれる。

(2) 地域拠点の利用実態

様々な活動に利用されている施設を諏訪・永山地区で10カ所選定して、アンケート調査および観察調査を実施した。運営内容や形式により、4タイプに分類して整理した。また、利用圏域から、地域型、地区型、町内型の3つに分類した。利用者へのアンケート調査からは、複数の施設を活動内容によって使い分けるものや特定の施設のみ利用するものなどがみられ、利用傾向から各施設の利用相関を分析した。

(3) 女性を中心とした地域活動

現在は、高齢化が進みタイア世代がニュータウンで過ごす時間が増え、女性の就業率も高まるなど、地域活動の主体が初期開発時とは様相を異にしているが、ニュータウンの始動・大量供給期は、女性が地域活動の中心的役割を果たしていた。そこで多摩ニュータウンのなかで最も活動歴が長く、女性を中心として現在も活動を続けている文庫活動を事例として取り上げ、その活動の変遷を分析した。

①全国の文庫活動 文庫活動とは、民間人や有志が、地域の子どもたちに本の貸し出しや、読書ができる図書館的な場を提供する活動である。活動の担い手の多くは母親達であった。

文庫活動の歴史は明治期にさかのぼるが、活動が急速に隆盛し全国に広まったのは、1970年代から1980年代であった。その背景には、日本経済の復興・高度経済成長、戦後の児童書出版の確立、公立図書館の発展・図書館観の転換などの影響がある。また、この時期は核家族が増加し、第二次ベビーブーマー世代が学童期を向かえるなど、地域での子育てが量的にも増大し、それにともない子ども文庫や子ども劇場などの教育文化活動が

盛んになったといわれている。多摩ニュータウンに人々が暮らし始めた時期と、こうして文庫活動が全国に広まっていく時期とはちょうど重なりあっている。

全国の文庫の設立数は、1960年代まではそれほど多くなかったが、1970年から年間50団体を越え、1970年代半ばに年間150団体となり、1980年にかけては年間250団体にとどきそうな勢いで増加していった。また、文庫活動に関する様々な団体が、1960年代から70年代にかけて組織されている。例えば、日本親子読書センター（1967年）、子ども文庫の会（1967年）、親子読書・地域文庫全国連絡会（1970年）、東京子ども図書館（1974年）などが設立され、文庫活動をバックアップしている。本研究で事例としてとりあげる「なかよし文庫」は、日本親子読書センターを立ち上げた斎藤尚吾氏から大きな影響を受けている。

②多摩市の文庫活動 次に、多摩市での文庫活動を概観すると、多摩市にも多くの地域文庫があり、それらをつなぐ役割の団体として、1981年に多摩市文庫連絡協議会が発足している。これは、「なかよし文庫」の呼びかけにより発足したもので、活動内容は、各文庫の情報交換、子どもの本の学習会の開催、文庫展での活動紹介などである。1988年に始まった文庫展は回を重ね、2011年に23回目を開催している。

この協議会にこれまで所属していた文庫は14団体あり、1970年代に2団体、1980年代に7団体が活動をはじめているが、10年程度で活動を休止した団体もあり、2007年時点では9団体が所属している。多摩市の主な公共施設と文庫連絡協議会に所属する地域文庫の活動場所をみると、これらの地域文庫は図書館やコミュニティセンターなどを利用して活動していることがわかる。

1970年代は、図書館がなく子どもに良い本を与えたいという切実な想いから手探りで文庫活動が始まっているが、近年では図書館の講座などがきっかけとなり文庫を発足するケースもあり、ニュータウン開発初期の活動状況とは様相を異にしている。

(4) 多摩ニュータウンの文庫活動：「なかよし文庫」

多摩市諏訪・永山地区の入居が始まってまもなく、文化的な施設がほとんどない状態の中で、1972年2月、雪の日に「なかよし文庫」は誕生した。現在も活動を続けている多摩ニュータウンでも最も古いこの文庫活動は、まさに多摩ニュータウンとともに歩んでいるといえる。

①街の整備状況と文庫活動 「なかよし文庫」の発足から現在までの活動の変遷を、多摩ニュータウンの街の発展とあわせてみていくことにする。多摩市の図書館・小中学校

の整備状況と文庫活動の展開をみると、1970年代前半の図書館も学校も少ない状況からスタートし、1970年代後半から1980年代にかけて小中学校がつつぎと開校し図書館も整備され、さらに1990年代中頃からは児童数の減少にともない学校の統廃合が進んできた様子がわかる。また、文庫活動の対象となる児童・生徒・幼稚園児数の推移からは、多摩市では1970年代は特に小学生の数が急増しており、図書館を始めとした子どもたちが利用する施設の整備が、子どもの増加に追いついていない状況がよみとれる。

②「なかよし文庫」の誕生 地域文庫を立ち上げるきっかけは、南永山小学校にできた「子どもたちに良い本を読む会」の席上で、母親が勉強会を重ねるだけでなく、子どもたちへの実践活動をすすめることを話しあったことによる。40年続いている文庫活動も、第一回目は母親7名と子ども11名が集い、風呂敷についで自分たちの本を持ち寄り、お互い好きな本を借りて帰るといったものだった。その後、貸し出し図書を増やし、会員数は半年で60名、一年で200名近くにふくれあがった。地域施設が整わないニュータウン初期、週一回の「なかよし文庫」が提供する読書環境やそれを通じたつながりを、いかに子どもたちが渴望していたかがわかる。

開催場所は、当初は永山団地の集会所だったが、何か行事があると使えず本も置けないため、4月からは諏訪商店街にある新聞販売店の3階を厚意により使わせてもらい、活動が地域で認知されてきたこともあり、翌年1月に再び永山団地の集会所に場所を移している。10月付けの規約では、会の目的として「子どもたちに本を読む喜びをあたえ、あわせて子どもの文化創造に役立つ活動」が掲げられ、活動内容として、本の貸し出しと読み聞かせ、子どもの本に関する勉強会、文庫だよりの発行、クリスマス会などのイベントを通じた交流など、があげられている。

貸し出す本は、月に一度来る都立八王子図書館の「むらさき号」から100冊単位で借り、さらに自治会に要望して基金をつのり「いちよう図書」として購入するなどしていた。そして、世話役の一人が地域の中で引っ越したことにともない、1973年7月に文庫の分室が新たにでき、ここも常時40名前後の子どもたちが集まり活況を呈していた。手探りで有志がはじめた文庫活動も、ようやく軌道にのりはじめてきた様子がうかがえる。

③多摩市立図書館と諏訪図書館の開館 「なかよし文庫」が始まった翌年の9月に多摩市立図書館がオープンし、ここから図書の団体貸し出しを受けられるようになるなど、文庫活動へのバックアップや子どもの読書環境も少しずつ整えられていくが、文庫活動をおこなうなかで、図書館への要望も同時に

強まっていったようである。市立図書館は、市役所の隣に位置し「なかよし文庫」がある諏訪・永山地区から子どもが利用するにはほど遠い。世話人の母親を中心に、多摩市議会に対して諏訪・永山地域に図書館を建設する陳情や誓願が繰り返し行おこなわれている。こうした行動の背景には、メンバーが文庫活動を通じて、学習会などを開き、図書館への理解と関心を深めたことがある。地域の社会・教育環境への疑問を感じるなかで、行政への働きかけが行われ、住民運動へと展開していったといえる。こうした運動が結実し、1979年に諏訪図書館が開館した。これにより、「なかよし文庫」の主要な活動のひとつであった図書の貸し出しは役目を終えることになった。

(5) 文庫活動「なかよし文庫」の展開

「なかよし文庫」の特徴は、図書の貸し出しと読み聞かせ以外に、多様な活動が行われていたことにある。当初から、他の地域文庫や図書館見学や、〇〇先生を囲んでといった大人だけの学習会が頻繁に行われており、1974年ころからは児童文学者や絵本作家などを招いて講演会も開催されている。なかでも特徴的なのが、1975年から始まった図書館学の専門家による製本の学習会である。

1979年以降は、私設図書館としての役割はなくなった「なかよし文庫」だが、親子読書会、多摩市文庫連絡協議会の設立と運営、憲法学習会、といった活動へと転換していった。親子読書会は、高校、中学、小学生の部と年代ごとに分かれ、取り上げた本について大人と子どもと皆で意見交換して記録をのこす形式で活動が10年ほど続けられた。ここでは地域の中学教諭が大きな役割を果たしている。

さらに、1990年代以降は、コミュニティセンターが整備され、その一方で、子ども数の減少による学校の統廃合が進んだ。こうした状況に対応し、「なかよし文庫」の活動も、コミュニティセンター内の児童館でおはなし会を行うという展開を見せていく。1993年から児童館トムハウス、1997年から永山図書館でおはなし会を行い、読み聞かせの活動を行っている。児童館トムハウスは多摩市落合にあり、「なかよし文庫」が当初の諏訪・永山地区の活動地域を超えて、幼児や小学生という読み聞かせの対象にあわせて活動をしていることが伺える。

(6) 文庫活動への想いと関わり方

次に、「なかよし文庫」に参加していた方々へのインタビューと「なかよし」という記録集をたよりに、当時の思いや活動への関わり方について述べる。

①教育的観点 「なかよし文庫」を立ち上げた動機は、地域に文化的なものがほとんどない状況の中で、子どもたちに少しでも良い本

を与えたい、良い環境を提供したい、というものであった。一周年記念として発行した「なかよし1」には、「お互い充分読書欲を満たす環境に置かれていない（図書館がない）ことや、これまで単純な常識で良しとしてきた子どもの本が、必ずしも良いだろうかという疑問、今花盛りとも思える程、子どもの本の氾濫している中で、私たちはいかに主体性を持って本を選ばなければならない立場にあるか、などの認識の上に立つてつくられました。」と初代会長が記している。また、活動を始めた思いが、「これからもずっと子供たちに読みつがれるものが何冊あるでしょうか。また親はその中からどのようにして選び与えたらよいか大きな問題です。雑誌、新聞の書評や先生方の推せんされる本をまず手にとって目で確かめたいと思っても身近かに図書館もなく、ちっぽけな本屋の店頭では不可能、まったくあせってしまいます。」と綴られている。このように、子どもの本をいかに選択するか、ということが差し迫った関心事であった様子がうかがえる。

②活動メンバーの覚醒

しかし、文庫活動に参加することは子どものためだけではなく、自身の成長につながったと語る人が多い。「なかよし1」には、次のような言葉が寄せられている。「このような童話を私も知ることによって、それまでまったく考えてみることのなかった子どもの感じ方を知ったり、何となく日々をすごすなかで我がはは親像も変化してきました。」

また、本が好きという共通点のある母親同士のつながりが生まれている様子もうかがえる。「文庫の日が楽しみである。本が好きで通って来る子供達との接触や、お母さん達との交わりがこの文庫で生まれ、又、何かそう云う人達の集まる雰囲気と云うようなものが好きだからである。」

1980年以降の憲法学習会が始まった時期に「なかよし文庫」に参加した母親は、より自覚的に自身の知的欲求が満たされたことを意識しており、「「エミール」なんて、学生時代の何かで聞いただけでしたから、地域で聞くとは思っていなかったんですよ。……それ（「なかよし文庫」で学習会に参加したこと）がね、自分の中に何か満たされなかったパズルの1ピースだったんですよ。私にとってね。……」とインタビューで語っている。

自分の子どものためだけでなく、地域の子ども、次世代を担う子ども全てに意識が広がり、学習機会を通じて自らの成長を感じながら活動に参加していた母親たちの姿がここにはある。

③地域社会へのアクション さらに、文庫を運営する過程で、子どもの教育環境への関心や、地域社会の課題について意識が高まり、

特に図書館については住民運動へと発展している。「なかよし1」に次のような考えが語られている。「図書館も、児童館も、子ども会らしい寄り合いの場も持たない地域の矛盾をもろに被って、本を求め、仲間を親って文庫へ来る子どもたちを、つい随時入れてしまう私たち。しかし文庫が、そのまま地域の施設の肩代わりをして歩みつづけるには、当然限界があります。」「わが国の児童図書館の貧しさを補うものとして発足した各地の文庫もさまざまな問題（資料、労働、経費の不足）で限界に達しているといわれています。生涯における人間形成のもっとも重要な時期を迎えている子どもに対し読書のよここび、たのしみを知るチャンスを与えることをもっと真剣に考えていかねばならないと思います。」

文庫活動を通して、地域の課題に気付き、それについて真剣に学び、仲間で討議し、そして行動する、こうした一連の活動を通して、地域住民としての自覚が生まれ、その後の活動の下地づくりがなされていったと考えられる。

④文庫活動と家庭の両立 地域活動をする彼女たちを悩ませていた問題のひとつは、家庭とのバランスであった。専業主婦が主流の時代、家事が疎かになることへの後ろめたさだけでなく、実際に夫からの抵抗も少なくなかったという。少し長いが、「なかよし3」（1976年）から引用しよう。

「文庫活動を続けていると当然のことながら子どもをとりまく多様な文化状況を考えることになり、教育環境などすべてにがまんがならない状況が見えてくるわけで、そこを何とかしなければという正義感が私たちを運動の深みへと誘い込ませるのだが、その足を引っ張るのは常に家庭であった。…「私は趣味で子どものための文化運動をやっております」と斜に構えて言ってはみるが、親子映画運動がはじまった当時は苦しくて何度もやめたいと思った。その中で私は少しずつ変わっていったのだと思う。いつやめようか、という消極的な思いが、今はやめられない、というところになり、そして、今は、もうやめられないということになってしまった。…」

葛藤しながら時代とともに自身も変化し、変容していく文庫活動に関わってきた様子うかがえる。子どものために始めた文庫活動は、同時に、活動している母親自身にとっても意義のあるものへとなっていたことがわかる。

（7）地域活動への展開

多摩ニュータウンで活躍している「なかよし文庫」の関係者が、現在までどのような活動を行ってきたのか、地域活動との関わりを述べる。

インタビューを行った6名のうち2名は、文庫連絡協議会の活動などを中心に現在も文庫活動を主軸に据えており、図書館に関する理解も深く、社会教育分野での活動を継続している。

また、文庫活動を継続しつつも、他の活動に主軸を移している2名のうち、ひとりには多摩市市議会議員を1987年からつとめており、文庫活動の初期に自治会とのパイプ役をたし、図書館建設運動にも熱心に取り組んでいた。もう一人は、文庫活動にたずさわりながら「多摩市親と子のよい映画を見る会」に関わり、その後、「TAMA CINEMA FORUM」の副実行委員長を務め、民生委員としても活躍している。

文庫活動からは離れている2名のうち、ひとりには「NPO福祉亭」の理事として地域の福祉活動に関わっている。もう一人は、多摩市内で転居したことから文庫活動からは遠ざかるが、後に鶴牧商店街の中に手芸店を開き、物を売るだけではない地域のコミュニティスペースづくりを目指している。実際に、インタビュー中も、昔の文庫活動仲間や、相談をもちかける女性が訪れていた。

文庫活動にかかわった母親たちは、読書を通じた社会教育への理解を深め、関係する全国組織とつながることで視野を広げ、図書館行政を通じて地域社会への関心を高め、さらに、活動の立ち上げと運営を通して行政や地域社会とやりとりする実践的なノウハウを身につけていった。さらにこうした活動を通して、仲間づくりをし、人脈を広げていったのである。

現在も文庫活動に関わっている人と、それ以外の地域活動を行っている人がいるが、何れにせよ、文庫活動で世話人をつとめ、積極的に活動をしていたメンバーは、その後も様々なかたちで地域に深く関わり続けている。

(8) まとめ

1970年代の「なかよし文庫」は、地域に図書館がなく、集会所の利用もままならない中で、有志の母親たちが立ち上げたものだが、またたくまに地域の子もたちが大勢集まるようになり、分室もできるなど活発に活動を展開していた。1980年代は、諏訪図書館が開設されたこともあり、本の貸し出しから、大人向けの学習会と親子読書会へと活動の重心が移ってきている。さらに1990年代以降、学校の統廃合が進み、コミュニティセンターが整備されると、活動の場を発祥の地である永山から他の地域へと拡大していった。こうしてみると、この地域活動が、地域施設の整備状況と密接にかかわりながら展開してきたことが改めてよみとれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①余錦芳, 松本真澄, 上野淳: 多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭利用者の地域生活様態とその地域社会における意義, 日本建築学会計画系論文集, No. 679, pp. 2025-2034, 2012. 9, 査読有

②余錦芳, 松本真澄, 上野淳: 多摩ニュータウン高齢者支援スペースー福祉亭の活動と利用の実態についてー日本建築学会計画系論文集, NO. 671, pp9-18, 2012, 査読有

③國上佳代, 余錦芳, 松本真澄, 上野淳: 多摩ニュータウン諏訪・永山地区における高齢者のための居場所形成とその利用・認知に関する分析, 日本建築学会計画系論文集, NO. 663, pp. 973-982, 2011, 査読有

④上野淳, 松本真澄: 自立都市をめざす多摩ニュータウンの再生・活性化: 都市住宅学, Vol. 69, pp. 16-21, 2010,

⑤田中まゆみ, 松本真澄, 上野淳: 多摩ニュータウンにおける地域活動の展開: 多摩ニュータウン研究, Vol. 12, pp. 73-80, 2010. 3, 査読有

[学会発表] (計8件)

①上原洋八, 吉川徹, 讃岐亮: 利用者構造の変遷に着目した公共施設の出現と統廃合の分析ー多摩ニュータウンの小中学校を例として, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, 2012, pp. 1017-1018 (2012. 9. 12・名古屋大学)

②松本真澄, 國上佳代, 余錦芳, 上野淳: 多摩ニュータウン諏訪永山地区における高齢者の居場所の利用状況と認知度に関する調査, 日本建築学会学術講演梗概集, F-1, 2010, pp. 1503-1504 (2010. 9. 11・富山大学)

[図書] (計1件)

上野淳, 松本真澄: 多摩ニュータウン物語, 鹿島出版会, 全209頁, 2012

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 真澄 (MATSUMOTO MASUMI)

首都大学東京・都市環境科学研究科・助教
研究者番号: 60229573

(2) 研究分担者

上野 淳 (UENO JUN)

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授
研究者番号: 70117696

吉川 徹 (YOSHIKAWA TOHRU)

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授
研究者番号: 90211656